

能の中の女性像―〈熊野〉の場合―

三宅 晶子

男の理想像ともいふべき、ひたむきで純粹な女を描く、能の大成者世阿弥（井筒・松風・砧など）。その女婿の金春禅竹は、もつと現実的でいかにも女そのものの、その分曖昧さも不透明さも合わせ持った、生身の女を創り出した人である（野宮・定家など）。「女体」を幽玄に最適なものまねの素材と考えていたらしい世阿弥とは異なり、禅竹は女を描くということを中心として、諸作品に取り組んだのであろうか。ほぼ確実に禅竹作と考えられる〈熊野〉をとりあげて、現代にも十分通じる、禅竹の人物造型法の一面を示したい。

「熊野・松風と米の飯」と言われたように、江戸時代には庶民の間でも謡の人氣が高かった曲である。禅竹は〈熊野〉を「春の曙」に、〈松風〉を「秋の夕暮れ」にたとえ、特に高く評価しており、二曲を並び賞するのは、禅竹に始まったらしい。自作を、尊敬する師であり義父でもある世阿弥の作品と並べるところに、禅竹の自信のほどがうかがえる。

熊野がなぜそんなにも帰国したがるのか、あずまに好きな男がいるので、それに逢いたいためなのだという伝書が喜多流にはあると『六平太芸談』（昭和四十八年八月、竹頭社刊）は伝える。

例えば伝書によると、湯谷の心持に就て、このシテは……年老いた母親の文が届けられ、宗盛に御暇を願うのだが、実は、「いかにせん都の花も惜しけれど、馴れしあずまの花や散るらん」という、そのあづまに、すきな男がいるので、それに逢いたいためなのだ、その心持が大切だ、というようなことが書いてある。

ただし六平太自身は、そういう解釈を表に出すことには否定的で、

どうも怪しからんことで、湯谷の曲のおもてには、そんなことは全く出ていませんが、然し舞台で湯谷を演じるとなると、寂しい中にもるシテの花やかな一面、それは老母のいたわりということだけではなかなか現われて来ない。帰りたいのにひき

留められる、その悲しみ、哀傷だけならば、ただいっもおもてを曇らせて、いく度もシオリをして、下を向いて泣いていれば事は済むようなものですが、そこに忘れ難いおもかげがあつて、心ならずも仕えてはなれ宗盛の他に、若い愛人が遠くはなれてゐる。「東路とてもひがし山、せめてそなたも懐かしや」この気分を活かすための心得としてこの伝書の意を解くと、いかにも湯谷の舞台がしんみりした中に花やかになつてくると語つてゐる。

六平太の言葉には〈熊野〉の特色を指摘する二つの重要な事柄が含まれている。すなわち、この曲には「華やぎ」があること、そしてそれがどこからくるのか「曲のおもて」には現れていないことである。その一つの解釈として、「伝書」の伝える「東に男がいる」が生まれるのだらう。熊野という女性は、それは華やかで魅力的だということでもある。

〈熊野〉という能のストーリーが奇怪であるとして、『近代能楽集』の「熊野」を書いたのは、三島由紀夫である。三島はユヤが帰りがたがるのは国にいる恋人に逢うための口実であると設定し、さらに宗盛はユヤの嘘をすべてわかっている、虚構の美を眺める楽しみに浸っていたの

だとする。権力者宗盛と、その財力に吸い寄せられて、嘘で塗り固められて美しく咲いているあだ花のユヤ。二人の関係はすべて虚構の上に成り立っている。宗盛が真実を必要としないのと同様、ユヤも実は宗盛はおろか国の恋人とやらにも、真実の愛情は持つていない。時分の花と咲き誇って男を魅惑する、その美しさだけが真実なのかもしれない。さすがに三島ともいべき新しい「熊野」ができあがっている。

最近では、田代慶一郎が『謡曲を読む』（昭和六十二年六月、朝日選書）において、宗盛と熊野の愛情関係をテーマにこの能を読み解こうとしている。宗盛は終始熊野の気持ちを引き立て、慰めようとしており、熊野は旅立ちの時になつて宗盛への愛着に気付くと指摘する。

以上、伝書・六平太・三島・田代による、四つ熊野の解釈を紹介した。六平太以外のいずれもが、熊野の恋愛感情がどこにあるのか、というところから熊野という人物を考えようとしている点に、共通性がある。その立場からみると、熊野の態度は不可解であるという評価が生まれる。「熊野」は男女の別れを扱った現在能（出来事が時の経過に従って演じられる能）であるので、どうしてもその男女関係、特に愛情問題に興味がいくの

であろう。

しかし、実はこの男女関係には、恋愛関係はないのである。今を時めく平家一門の中心的存在である宗盛にとつて、田舎から連れてきた遊女は、宴席に侍らせ歌い舞わせ、一時の慰みとする程度の存在である。だから花見に連れ出そうとしたのは、普通のことなのだ。また熊野にとつて宗盛は、自分を雇っている主人である。二人が雇用関係にあるのは歴然たる事実で、だからこの二人にとつては愛情は問題ではない。熊野は命令とあらば花見にも出かけ、宴席で酌をして、歌い舞うのは当然である。彼女はそれを専門の職業とする、いわばプロなのだから。たとえば『平家物語』の祇王・祇女・仏などを考え合わせれば、納得できる。彼女達と清盛との間が、愛情関係で成り立っていたとは、現代の読者であろうとも、誰も考えはしないであろう。そこが『義経記』の描く静御前と義経との関係とは、決定的に違うところである。もちろん宗盛は熊野を気に入っている。熊野が花見に出かけようとしている主人に帰国願いを出すのも、自分が気に入られている自信の裏付けがあるだろう（祇王が自信満々だからこそ、仏を清盛に引き合わせるのと同様に）。華やかな生活を捨てて、母の看病のために帰国したい

と素直に思えるのも、都での生活が、充実した後悔のない毎日だったからに違いない。『近代能楽集』のユヤのように、都振りに染まって虚構の世界に身を投じてしまったのでもない。傷心を抱いて逃げ帰るのでもない。その意味で宗盛と熊野はともにもいい関係を結んでいたろう。彼女は信心篤い孝行娘であり、プロの自覚をしっかりと持った、りっぱな遊女なのだ。六平太の言う「花やかな一面」は、そういう今が盛りの「遊女」熊野の華やかさなのではなからうか。

それを象徴するかのように、〈熊野〉の曲としての美しさは、爛漫の春、花盛りの都を描出させることによって、獲得されている。それこそが、禪竹の意図だったかと思えるほどに、ここに描かれる春は美しい。男女の愛情が問題にされていないからこそ、その美しさは完璧なのである。しかも一点の染みもない無欠の絵空時の美ではなくて、母を氣遣う素直で人間的な心の曇りが重ねられることによつて、深みと真実味を供えることのできた美しさである。

愛情関係を持ち出すと、それが途端に崩れていく。いつもいつも、女が登場すれば恋愛とは限らないのである。

（横浜国立大学助教）